

第4分科会

楽しいが積み重なって一人ひとりが輝くような遊びを考える

発表者	山本 有紀子 (認定こども園稲葉幼稚園・稲葉保育園)
指導助言者	石上 令子 (八頭町役場環境福祉課保育専門員)
司会者	西川 優子 (認定こども園稲葉幼稚園・稲葉保育園)
記録者	有田 あかね (認定こども園稲葉幼稚園・稲葉保育園)
	伊豫 友海 (認定こども園稲葉幼稚園・稲葉保育園)

1 発表の概要

(1) 主題設定の理由

本園5歳児は、クラスの垣根を越えて仲が良く、当番活動や興味があることには進んで取り組んでいる。しかし、遊びの様子を見ていると遊びが単調になりがちで、子どもたちの「楽しい」「もっとやりたい」「嬉しい」といった感情があまり見られない。さらに、自分たちで考えて工夫して遊びを進めていく力の弱さも見受けられる。これらの姿は、遊びへのおもしろさを感じられなかったり、保育教諭の思いから「はみだす」ことへの不安が表われたりしているのではないかと考える。子どもたち一人ひとりが安心してのびのびと遊び、自分の世界を広げていくような保育を実践していきたいと考え、この研究に取り組むことにした。

(2) 取り組みについて

◎課題の共通理解

研究にあたり、本園の子どもたちの姿や園の現状と課題を改めて見つめていき、昨年度の園内研修ではそれぞれの思いや考えを付箋に書き込んで持ち寄り話し合った。保育教諭間で子どもたちの生活や遊びを見直していく中で、「素直に子どもたちの感情があふれ出す保育」「子どもたちが誰かに思わず伝えたいくなるような心の動く保育がしたい!」という思いを共有し、ここでそれぞれの保育教諭が抱えていた悩みが共通の認識となり、同じ視点で子どもと遊びを見つめていく確認ができた。

◎研究の方法として

<前期> 5月17日～6月10日

子どもの姿(友だちとの関わり)と保育教諭との関わりに視点をおいて観察し、記録をとり、振り返りをする。

<後期> 6月14日～7月上旬

- 誰と何をして遊んでいるかに着目をして、記録をとる。
- 子どもを取り巻く環境構成の工夫と見直しを行う。
- 記録の振り返りをする。

以下の3つの視点で読み取る。

視点① 遊びのおもしろさがどのように変化していくか

視点② ①が仲間同士でどのように共有されているか

視点③ 遊びの中で経験していることは何か

(3) 実践事例

実践を進めるにあたり、年長児の現状と課題を踏まえ、5領域の「表現」と「人間関係」に重点を置いて2つの目標を挙げた。

- ・考えたり、工夫したり、じっくり遊ぶ中で満足感・達成感を感じ、自己発揮しながら遊ぶ子ども（表現）
- ・集団の中で友だちの良さに気づき、互いの考えを出し合い、友だちと関わり、遊ぶ子ども（人間関係）

◎ **実践事例①**

新聞紙遊びをしよう！① ～二人に一枚の新聞紙～

新聞紙が身近で扱いやすい素材であり、保育教諭が子どもたちが新聞紙を使ったやりとりをイメージしやすかったため取り上げた。

【ねらい】友だちと一緒に新聞紙遊びを楽しむ

《子どもたちの姿》

- ・保育教諭の「一枚の新聞紙でどんなことができるだろう」の問いかけに対して、2人組で新聞紙を持って走ったり、引っ張ったり、揺らしたりと試す姿が見られた。
- ・「座布団」「トンネル」「こいのぼり」「つなひき」等、発見したり楽しかったことを友だちに伝える姿があり、みんなで試していた。

◎ **実践事例②**

新聞紙遊びをしよう！② ～一人に一枚の新聞紙～

新聞紙を使って子どもたちが自由に遊べるよう、保育教諭主導ではなく保育を進めた。

【ねらい】新聞紙を使ってイメージを広げながら遊ぶことを楽しむ

《子どもたちの姿》

- ・剣やマントを作ったり、昨日していた引っ張りあいこをしたり、保育教諭と兜や紙てっぽうを折ったりする姿が見られた。
- ・何をしたらいいかわからない子は、友だちの様子を見たり、真似をしたりしている子の姿が見られた。

保育教諭は子どもたちがもっと協力して遊びを進めていこうと見込んでいたが、遊びの広がりや工夫がほとんど見られず、保育教諭の意図するところとは違う姿が見られた。そこで、子どもたちが工夫してイメージを持って遊べるようにと年長児保育教諭で共通理解をし、環境の再構成(保育室の既製の玩具と個人持ちの粘土・お絵描き帳と絵本を全て取り除き、代わりに様々な種類の廃材を保育室に置く)をすることにした。

◎ **実践事例③**

廃材工作をしよう！①

たくさんの素材を使って、自由な発想で工夫して遊べないか、また作る過程や作った物で友だち同士のやりとりが生まれないと保育教諭が期待して取り組んだ。

【ねらい】様々な素材を使って友だちとイメージを広げて、工夫して作ることを楽しむ

《子どもたちの姿》

- ・男の子はたくさん素材をある分だけ使いたい思いが強く、できたものに満足している子どもが多かった。
- ・女の子は同じ色の和紙をカップに入れてジュースを作ったり、毛糸を使ってごちそうを作ったりしながら、2～3人の友だちとのやりとりを楽しみ始めていた。

しかし、毎日、記録をとる中で、子どもたちは自分たちで考えながら遊んでいるだろうか、と保育教諭は悩む日々だった。

数日後、指導助言の先生に子どもたちの様子を見てもらおうと、「この子たちは遊んでいる。先生のねらいが明確なものでないと、子どもたちを見る視点が定まらない」と助言をいただいた。この時、保育教諭自身が子どもを見つめる視点について、検討するに至っていなかったことに気づかされ、「ねらい」をはっきりさせて、「評価・考察」をしていくことを年長児の保育教諭の目標として、活動後には研究の方法としてあげている3つの視点で振り返ることにした。

◎ 実践事例④

廃材工作をしよう！②

指導助言の先生に子どもたちの遊びの様子を見ていただき、ねらいの立て方と評価の仕方について再検討を行い実践した。

【ねらい】

- ・友だちとの関わりの中で作りたいものを明確にし、工夫したり、協力したりして作ることを楽しむ（人間関係）
- ・自分なりの作りたい物のイメージを豊かに表現して楽しむ（表現）

【評価】

自分の作りたい物のイメージに向かって自分の考えを出したり、友だちのアイデアを取り入れたりと、作ることを楽しんでいる。

《子どもたちの姿》

- ・友だちの作っているものと合体させたり、相談したりしながら協力して作り上げる等、遊びが広がり、協同性が生まれてきた。
- ・友だちとの会話が増えてきて、作りたいものを明確にし、イメージを膨らませながら一緒に作ろうとする姿が見られた。

《3つの視点で評価・考察》

視点① 遊びのおもしろさがどのように変化していくか

子どもたちの作りたいものが明確になると、自分でイメージを膨らませながら素材を選び、試行錯誤しながら作ることができるようになった。さらに友だち同士の関わりの中でイメージを広げて、一緒に作った物によって遊びが楽しくなることに気づいた。

視点② ①が仲間同士でどのように共有されているか

初めは個々の遊びが多かったが、次第に同じ遊びに興味を持った友だちが集まり始め、自分たちで会話を通してやりとりをし、新しいアイデアを取り入れ、イメージを広げていた。

視点③ 遊びの中で経験していることは何か

- ・いろいろな物を工夫して作ったりする中で、必要な素材を見つけ出し、素材を活かした使い方ができるようになった。
- ・友だちとのやりとりを通して、同じ目的に向かってイメージを広げ工夫して作ること、協力して作ることの楽しさを感じる経験をした。

◎ 実践事例⑤

段ボール遊び ～小さな幼稚園を作ろう～

廃材工作の時に、友だちと協力して段ボールをつなげたり、開いてくっつけたりして遊びがダイナミックに広がっていった。そこで小グループを作り、みんなで一緒に遊びたいと考え、段ボールを題材にし、遊ぶことにした。

【ねらい】友だちと試行錯誤しながら遊びを展開し、「小さな幼稚園を作る」という目的を表現する喜びを味わう（人間関係）

【評価】互いに思いを伝えあったり、新しいアイデアを取り入れたりとみんなで協力しながら、小さな幼稚園を作るという目的をやり遂げようとする。

《子どもたちの姿》

- ・日頃は控えめな子が道やトンネルを作ると意気込んでいて、その子に引っ張られる形で遊びが進むグループがあった。
- ・数人で思いを伝え合い、話し合い、協力するようになり、できないことがあっても友だちと相談しながら自分たちでなんとかしようとし、「できた」という満足感を味わうことができた。

《3つの視点で評価・考察》

視点① 遊びのおもしろさがどのように変化していくか

思いを伝え合い、友だちに思いを受け入れてもらう中で、自分が考えたことがつながっていき、形になっていく喜びを感じられた。

視点② ①が仲間同士でどのように共有されているか

- ・面白いことを見つけ、顔を見合わせて笑ったり、一緒に製作していた物が完成し、喜び分かち合ったりしていた。
- ・友だちと考えが合わなくなり、悔しさや悲しさを味わいながらも、保育教諭が仲介に入り、問題を解決したことで、試行錯誤しながら一緒に作っていた。

視点③ 遊びの中で経験していることは何か

「小さな幼稚園を作る」という目的を共有し、工夫し合ったり、力を合わせて問題を解決したりして、成功や失敗を繰り返しながら、友だちと協力して作り上げる満足感や充実感を体験することができた。

(4) 反省と考察

日々子どもたちが遊べないのはどうしてだろうかと悩んできたが、指導助言の先生に、「遊べているし、遊ぶ力を持っている」「保育教諭のねらいが定まっていなくて子どもを見る視点が定まらない」と助言をいただいたことで、子どもの中に原因を探すのではなく、保育教諭の中に原因を探すよう

になった。保育教諭が何を育てたいのか、どう育ててほしいのか「ねらい」を明確にしておくことの大切さ、そして、自分が立てた「ねらい」に基づいてその日の保育がどうだったか、きちんと「評価・考察」をすることで、日々の実践の質を高められるということも大切なことだと改めて確認できた。また、既製の玩具に頼って過ごしていた子どもたちに廃材や新聞紙、段ボールを渡した時、目の前の物を使って工夫して考えたり、友だちと相談したりして遊ぶ姿が見られ始め、「環境」を考へることの大切さを感じた（物的環境）。そこに、保育教諭が交わり、友だちのアイデアや工夫を紹介し、友だちに目を向ける機会を意識的に設けることで、友だちとのつながりがより強くなったことを目の当たりにした（人的環境）。

（5）今後の課題

この研究を通して、保育教諭の関わり方と子どもの姿は大きく変化しているが、学年の目標はまだ達成できていない状況である。これからも引き続き、子どもたちが「友だちと一緒に嬉しい」という感情や「楽しい。まだやりたい！」という思いがあふれ出すような保育に取り組み、目標に向かって継続していきたい。

2 研究討議

（1）発表内容に対する質疑応答

- Q 1. 新聞紙で遊んでいる時は部屋の隅にいて参加できなかったA児が、ダンボール遊びでは積極的に遊んでいた。積極的に遊ぶようになった「きっかけ」は何か？
- A 1. 新聞紙遊びでは、保育教諭はA児を気になる子として取り上げていた。A児は最初の頃、自分の思いが出せず保育室の隅にいて目につく廃材をくっつけるのみだったが、『おみくじ』を作ったことで友だちの注目が集まるようになり、それがきっかけで見ると見るA児の表情が変わっていった。
- Q 2. 保育教諭が必要以上に言葉をかけないと言われたが、何か先生なりに友だち同士がつながる言葉かけや仕掛けはあったのか。
- A 2. ある時、子どもたちがトンネルを作りたいと保育教諭に投げかけてきた。「いいなあ、みんなと作ったら楽しいかもしれないなあ」の返事にとどめ、具体的な言葉かけは控えた。トンネルは、大人が抱いていたイメージと違い、小さいダンボールをくっつけるばかりだったので、もどかしさを感じたが、それなりに形にできた子ども達は満足感を抱いていた。
- Q 3. 事前に道具、セロテープ、ガムテープ、のり等の使い方指導はあったのか。
- A 3. はさみの使い方は、持ち方、持ち歩き方の声掛けをしてきた。テープについては、出したら出しっぱなしだったが、遊び込めるようになると使い方が変わってきた。
- Q 4. 新聞紙遊びの2週間の取り組み内容について教えて欲しい。
- A 4. 新聞紙を使ったふれあい遊びから始め、「道づくり」「お化け屋敷」「迷路」と発展していった。保育教諭主導で進めたためか、子ども達はあまり積極的に関わっていなかった。自由遊びの時間に「やろう」と言う発言もなく、保育教諭の誘いがなければ活動につながらなかった。

Q 5. 保育教諭の保育の「ねらい」と子どもを見る「視点」が定まってから、子ども達はどのように変わってきたのか。

A 5. 「ねらい」と「視点」が定まるまで、子ども達の悪い所ばかりに目が行き、「なぜ遊べないのか」という思いに捉われていた。子ども達の遊びに対する方法や感じ方は様々。「ねらい」や「視点」定まってからはその子なりのそのままの姿、工夫や考えを受けとめることができるようになった。

(2)指導助言（発表・質疑に関して）

○遊びの充実

子どもが「おもしろい」と心から思えるような遊びが子どもを育てる。ところが稲葉幼稚園、保育園の5歳児は遊びが見つからず、ふらふらしている、自分の作ったもので遊ばない、愛着がわからない。戦いごっこになってしまった。

○遊びの見直し

1.環境の見直し

保育教諭がねらいをもって環境構成をする。子どもはその環境に関わり意味づけていく。

2.保育教諭は、子ども達がどのような思いで遊んでいるのか読み取ることが大事。

○環境構成

- ・環境構成の見直しを行い、既製の玩具、ブロック、ままごとなど機能的な遊びから構成的な遊びに変えた。

機能的な遊び モノや玩具の仕組や機能を理解し、それにあった遊びをする。

⇒ブロックで作りあげてもそれ以上は発展しない。

構成的な遊び 何かができあがる過程がおもしろい。

⇒廃材は構成遊び、過程がおもしろい。自分のやったことに自分で驚くこと、自分で壊して発見することがいい。

○読み取りの視点

- ①遊びのおもしろさがどのように変化していったか
- ②それが仲間同士でどのように共有されたか
- ③遊びの中で経験していることは何か

- ・記録、ビデオで①～③の視点に基づき遊びの姿を読み取るようにした。発達気になる子、一人で楽しむ子、傍観している子を強引に誘いこまず、側に寄って「〇〇ちゃんの作っているものはおもしろそうだね」と声をかけるのみ。一人でも同じ空間にいたので、遊びのおもしろさは感じている。意味づけは子どもがしていくことなので、人的環境はそれで十分。⇒環境は子どもを活かす。

○保育者の役割

- ・「ねらい」をもって環境を構成したとしても、その環境に関わり意味づけをしていくのは、子ども自身であること。
- ・保育教諭は子どもがどう環境に関わり意味づけしていくか読み取ること。日案での評価、反省は子どもの内面を読み取る視点を大事にする。

- ・「遊びを楽しくさせたい」と思うあまり、援助を焦り保育教諭のイメージで遊びを引っ張ったりしない。⇒見守り保育
- ・保育教諭が環境を先に作りすぎると、モノを作ることから遊びのイメージが広がらない。

○5歳児

- ・協同的な学びが可能になる時期
心と力を合わせて共に助け合って取り組む活動
- ・協同的な遊びが楽しいと思えた遊びが、『小さい幼稚園を作ろう』になった。
子どもにどのような力が身に付き、経験になったかは卒園までの間に見ていかないといけない。

○協同的な活動を通して育つもの

- ・イメージで遊ぶおもしろさの充実
- ・仲間同士で話し合う経験
- ・仲間と考えを出し合う経験
子ども達が学んだものは、集団への意識の変容
⇒「一人も楽しいけど、仲間といるともっと楽しいんだね」

(3) グループ討議 (年齢別グループ討議)

討議内容

- ①「楽しいが積み重なって一人ひとりが輝くような遊び」って?
- ②どのような視点で振り返り(評価)をしているのか?

【1グループ(0、1歳児)】

- ①0、1歳が混合保育をしている。生活リズムが違うため一緒に過ごすことは難しく、今ある環境で楽しいと思える保育をどのように行うかが課題。
トイレットペーパー遊び・・・触れる、絡まる、寝転がる、先生の真似をする。安心感を持って遊びに入ると自分から手をさし出す。身体を寄せてきてスキンシップをとり遊びに入る。
- ②「一人ひとり生き生きとした表情が遊びの中で見られたか」「発達や育みの保証ができたか」「たっぷり遊び、生活につながっているか」。養護面では、「愛情、愛着形成、安心感から遊びに取り組んでいるか」を評価している。

【2グループ(2歳児)】

- ①片栗粉粘土遊び・・・感触遊びから、食紅で色を付けイメージを広げる
- ②保育者が子どもの言葉をひろって遊びの発展にひろげることが大切。

【3グループ(3歳児)】

- ①11ぴきのねこの絵本・・・人形遊びからどろんこあそび、サーキット遊びにつなげていき、イメージを共有しながら楽しめた。
- ②全体を見る。個々の経験の違いを考慮して振り返ることが大切。

【4グループ(4歳児)】

- ①砂場、マットで運動遊び、ゲーム遊び、猛獣狩り、ボディペインティング、どろんこ、ハンカチ落としなど。

②「好きな遊びを見つけたか」「思ったこと、感じたことを自分なりに表現していたか」「友だちと関わりを喜んでいたか」「汚れを気にせずダイナミックに遊んでいたか」「保育者のねがいや思いは、この活動に対してのねらいに合っていたか」を基に振り返りをする。

【5グループ（5歳児）】

- ①製作遊び・・・個で作ったものを持ち寄って友だちに認められたり、自分の思いを伝えたりすることで、協同的にものを作っていき、みんなで楽しんでいく。
ゲーム遊び・・・繰り返し行うことで子ども主体で進められるようになった。子どもたちの話し合いの場を設定し、意見を出し合うことでお互いを認め合う経験をする。
- ②5領域の振り返りが大事。また、子どものつぶやき、表情、態度を見る。反省点だけでなく、良かった点を次につなげられるようにしていくことが評価として大事。

【6グループ（学年混合）】

- ①布好きな保育者⇒毎日保育室に布を置いておく。⇒子ども達はひっぱったり、かけたり、ままごとをしたり、病院ごっこを繰り返し楽しんでいる。
- ②人的・物的環境、時間が適切だったか。良いことだけでなく苦手なことをどのように克服できたのか。保育者の援助は行き過ぎではなかったか。適切だったか。

3 指導助言～全体のまとめ～

① 楽しいが積み重なって一人ひとりが輝くような遊び」ってどんな遊び？

【1グループ（0，1歳児）】

0，1歳児が同じ保育室で生活をしている園が多く、どの園も保育室、遊戯室にわかれて遊ぶなどで一人ひとりの発達保障を心掛けている。養護では、安心した生活の中で、できることをたくさん先生に認めてもらい、自分を輝かしていく。

【2グループ（2歳児）】

遊びの中で言葉を広げていく。喃語から2語文へ。言葉に視点をおいて遊びを見ていく。

【3グループ（3歳児）】

絵本から遊びの展開。「こうしてみよう」とイメージを共有している。一人ひとりの輝くを受けとめている。

【4グループ（4歳児）】

ハンカチ遊びなどを通して自分の気持ち、人の気持ちが違うことを知る。
ねらい=ねがいを視点に。「どう育てていきたいのか」「どんな姿になってほしいのか」ねらいをもって保育を展開していく。4歳の力があるから5歳の力につながる。

【5グループ（5歳児）】

友だち同士で話し合い、いろいろなことにチャレンジをしていく。同じ遊びを繰り返し、積み重ねると遊びが違ってくる。その子その子の学びで変わってくるのが、5歳の大きな力。先生が指導しなくても子どもが、子ども同士で伸びていく。「よかったこと」の視点を入れるととても良い。

【6 グループ（学年混合）】

布を使った遊びでは、いろいろなものを提供し、子どもらしい展開と刺激がある。
行き過ぎた援助の振り返り、お互いの意見の出し合いが園内研修へ広がっていく。
自己評価⇒それぞれ集まったものが園評価。一人ひとりの課題が全体への課題になる。

② どのような視点で振り返り（評価）をしているか

[資料1 参照]

子どもの発達を引っぱろうとしないで、太らせる。子ども達は同じことを繰り返し経験していく中で、考え、工夫しながら遊びを展開していく。「おもしろいね」「工夫したね」と先生がおもしろがる
と、子ども達は「もっとこうしてみよう」と考えていく。子どもはみんなが力を持っているが、出し
きれない。家庭環境、愛着障害等、子ども達はいろいろなものを背負っている。大変な「思い」を持
っているので、発達が凸凹するのは当たり前。それを「遊びなさい」と引っぱるのではなく、内面に
寄り添うことが大切である。日々大変ではあるが、その気持ちを大切に子ども達と関わってほしい。

年齢別 3つの視点のキーワード			
	①遊びの面白さがどのように変化していったか	②仲間同士でどのように共有されたか	③遊びの中で経験できたことは何か
1歳児	個から集団への広がり 保育者からの一人立ち	真似からの広がり 楽しさの共有	感触 面白さ、興味
2歳児	遊び方、遊びの般化 遊びの広がり(指先から全身)	真似、模倣 面白さ 見せ合う	会話、模倣 描く面白さ 感覚、指先
3歳児	遊びの般化 言語 遊びへの工夫 遊びへの般化 個から集団への広がり	面白さ、興味の広がり 真似、模倣からの広がり 友だちの工夫 会話の広がり	ルールの理解、集団遊び 遊びの繰り返し、発見 「〇〇してから〇〇する」の 発達の力 感覚
4歳児	個から集団への広がり 全身を使つての遊びのおもしろさ 動きの変化の面白さ 遊びへの般化 工夫 偶然、遊びの広がり 喜びの共有	知ること、伝えること 役割分担 異年齢のつながり 伝え合う イメージの広がり 面白さ、興味の広がり 話し合い	みんなで出来た達成感 挑戦、自信 協力、約束 主体的、ルールづくり 協力、話し合い 感触、変化 他者への気持ち
5歳児	遊びの般化 頑張ることへの喜び 仲間で決めたルールの展開 イメージづくり、見せ合う 相手の気持ち理解	教え合う、相談し合う 誘う 話し合う、励まし合う、 共通の意識 遊びの広がり 模倣、学び	面白さ、思考、予測 目標を持つ ルールを守ることへの意識 満足感、自信、工夫、協力 協同性